

うがり よこあな
宇刈の横穴

—宇刈横穴N群82～85号穴—
発掘調査の概報

目 次

1. はじめに	1
2. 宇刈横穴のつくられた頃	1
3. 宇刈横穴群の特徴について	3
4. 調査のあらまし	6
5. 副葬された品々	8
6. おわりに	11

1985

袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は日研フード本社株式会社の委託をうけ袋井市教育委員会が実施した、宇刈横穴N群^{5, 29}82～85号穴の緊急発掘調査の概報である。
2. 調査は袋井市教育委員会社会教育課文化財係の寺田義昭・松井一明が担当した。
3. 本書の編集は松井一明（文化財係）が行ない執筆分担は文末に記した。
4. 調査と本書の発刊に係る事務は袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行なった。
5. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 調査の際には、日研フード本社株式会社の格別の御配慮をいただき、記して感謝したい。

←表紙写真（N群全景、南の丘陵上から）

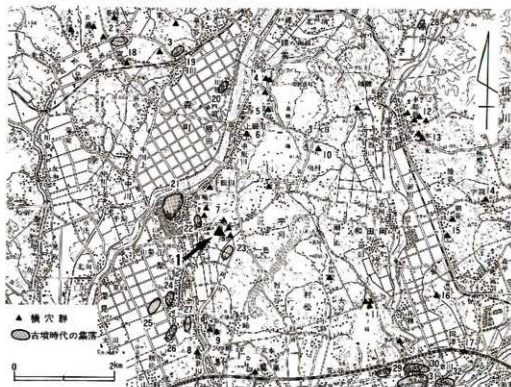


Fig. 1 宇刈横穴群の位置と付近のおもな横穴・集落址

- 1 宇刈横穴 2 片瀬・寺ノ谷横穴 3 久保の谷横穴 4 本堂・観音堂横穴 5 院内横穴
 6 岩ヶ谷横穴 7 春岡横穴 8 北ノ谷横穴 9 道ヶ谷横穴 10 白谷横穴 11 菅ヶ谷横穴
 12 宮坂・古銭横穴 13 楠ヶ谷横穴 14 十五ヶ谷横穴 15 堂前横穴 16 梶袋横穴
 17 岡津横穴 18 片瀬Ⅱ遺跡 19 名栗遺跡 20 上川原遺跡 21 稲荷領家遺跡 22 春岡遺跡
 23 岸久瀬遺跡 24 持持Ⅱ遺跡 25 持持Ⅰ遺跡 26 鶴田遺跡 27 川田遺跡 28 寺島Ⅰ遺跡
 29 不入斗遺跡 30 石ノ形遺跡 31 坂尻遺跡 32 原川遺跡

1. はじめに

袋井市内には695ヶ所（静岡県教委文化課調査）もの遺跡が発見されており、県内市町村の中でも藤枝市（687ヶ所）、磐田市（622ヶ所）を上回り、一番の遺跡数を数えています。遺跡の数から考えても、袋井市は古来より人々が住み易い土地柄であったといえます。また、袋井市内の遺跡の内、今回報告する宇刈横穴群をはじめとして菅ヶ谷横穴群（村松）、縄文時代の人骨、貝塚などが知られる大畑遺跡（岡崎）、古代の地方役所跡（佐益郡衙跡）であったと推定されている坂尻遺跡（国本）など、全国的に有名、貴重な遺跡が数多く含まれています。

こうした遺跡は、私たち袋井市民の祖先の遺産であるばかりでなく、祖先の歴史、知識を知るうえで貴重なものであります。この祖先の歴史、知識は、とすれば過去の知識と軽んじられがちであります。現在の私たちの生活を形作ってきたものであることは言うまでもなく、なお我々に多くの知識、教訓を授けてくれます。

この遺跡からえられる知識、教訓は、私たちの次の世代、未来へと引き継いでいかなければならないのですが、地上から消えていく運命の遺跡もあります。本書では、こうした貴重な遺跡の一つである宇刈横穴N群の82～85号穴が関係者の努力も及ばず、日研フード本社株式会社研修研究センター建設により破壊消滅するにあたり、せめて記録の上で残していこうと試みた発掘調査の記録の概要を書き記したものです。小冊子ではありますが、袋井市民の祖先の生活を少しでも知っていただくことができれば、本書の責務は果たされたと思います。

最後になりましたが、本調査が実現したのは日研フード本社株式会社の文化財に対する御理解と、清水建設の御協力があったことを明記しておき御礼の言葉といたします。

（袋井市教育委員会）

2. 宇刈横穴のつくられた頃

今回とりあげました宇刈の横穴は今から約1700年前から1300年前の400年間続いたといわれます。古墳時代のお墓です。古墳時代のお墓でもっとも一般的なのは、^{カヌツツツ}大門口家古墳（大門）、^{カヌツツツ}長者平古墳群（豊沢）などに見ることができるとおり、高い盛土（墳丘）をもった高塚の古墳です。古墳時代のお墓としての横穴は、イモ穴などの「よこあな」と区別するため「横穴墓」とか「横穴墳」などと呼ばれています。（横穴墓がより一般的になってきています。）

古墳時代のお墓の流れは大きく分けてみると、磐田市松林山古墳、掛川市各和金塚古墳など全長100m以



PL. 1 宇刈横穴N群遠景（矢印調査地点）

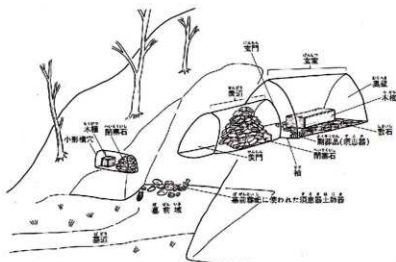


Fig. 2 横穴墓の模式図

上もある大形の古墳が造られた前半の200年間と、前述した長者平古墳群などの径10m程度の小形円墳（円形の盛土をもつもの）が数十基単位で造られた後半の200年間とに大きく変化いたします。横穴墓は、宇刈横穴群などを見てもらうと（Fig. 3）わかるとおり、百近い数の横穴墓が知られることや、今回出土した遺物から古墳時代の後半に造られたお墓と考えられ、長者平古墳群と類似点を多く見ることができます。こうしたお墓の造られ方の変化は、前半の大形古墳は、河川ごとぐらいの沖積平野を治めていた王様やその重臣たちのお墓であったのに対して、後半の頃のお墓は王様以外の一族の長や家族の長（家父長）をはじめとし、家族の人たちなどの数多くの庶民たちのお墓への変化と考えられています。また後半の古墳、横穴墓は何回かの埋葬が見られ、同一家族の数回の葬送が行なわれたと考えられることから「家族墓」と呼ぶ人もいます。

さて、ここで問題点が1つあります。それは、古墳と横穴墓はいずれもお墓ですが、外見は全然ちがいます。このちがいの原因はどのようなことか、造った人々の住む村ごとの生産力のちがいだとか、発展の仕方のちがいによるものだとか、種族のちがいによるものだとかいわれていますが、まだよく判ってはいません。みなさんも考えてみて下さい。

最後になりましたが、横穴墓の造り方について見てみましょう。Fig. 2 の図を見てもらいますとわかりますが、横穴墓は死体を入れた木棺を安置する玄室、木棺を入れる入口（羨門）から玄室までの間がありそこを羨道と呼んでいます。また入口前方には、今回の宇刈横穴群では山の斜面を四角形に削り出した平坦地（墓前域）を造り、そこで須恵器などの土器を使って墓前祭祀を行なっていることが判りました。そこから先は、横穴墓を営んだ人々が住む集落に



PL. 2 地蔵ヶ谷横穴群（現南幼稚園）

通じる墓道がのびていたと思われ字刈横穴群の場合、Fig. 1を見ると鼻欠端(23)、持持(24、25)、鶴田(26)、川田(27)、稲荷領家(21)の各遺跡が考えられます。(松井)

3. 字刈横穴群の特徴について

まず、字刈横穴群の特徴に、横穴の密集があげられます。現在、85基の横穴が確認されていますが、100基近くにのぼる横穴が群集するところは、ほかに菅ヶ谷横穴群(袋井市国本)、大淵ヶ谷横穴群(菊川町堀ノ内)等があるにすぎません。

そして、第2の特徴に横穴の規模が小さい点があげられます。

横穴は、丘陵などの斜面に穴を掘って墓としたものですが、石を積んで築かれた横穴式石室と同様の構造をなしているのが普通です。つまり、遺骸を安置する玄室と玄室への通路である羨道から成るのです。

字刈横穴群の玄室の長さは、約50cmのミニサイズから、3.65mを測るものまでありますが、平均すれば2.129mになります。字刈横穴群と同様、横穴の断面が尖頭形を呈する観音堂横穴群(森町飯田、23基)では、玄室長の平均2.93mとなります。

当時の字刈の人も観音堂に葬られた人も身長はさほど変わらないものと思われます。にもかかわらず、玄室の長さが80cmも違うのはなぜでしょう。

発掘調査によって玄室内の様子が見えかねる観音堂をみてみましょう。

観音堂では、玄室内の床面に礎が敷かれているものがあります。この礎は、玄室全体に敷かれているものもありますが、ほとんどは奥壁から玄室の途中までで、玄門寄りの部分には敷かれていません。したがって、この敷石の部分が遺骸を安置したところと推定できます。

言いかえれば、観音堂では、玄室に遺骸を安置する部分+アルファが存在するのです。

ここで、字刈横穴群に立ち戻ってみましょう。

字刈横穴群の玄室内の状況は、発掘調査された例が過去にないために、はっきりとはわかりません。けれども、2.129mという玄室の長さから考えれば、人を安置すればほとんど余分なスペースはありません。したがって、玄室の長さは、人間の身長ギリギリで作られているものが大半を占めると言っても過言ではないと思います。

これは、玄室の平面に限ったことではなく、高さの点でも言えることです。

奥壁の高さの計測可能なものは43基ありますが、これらを平均すれば1.336mとなります。奥壁の高さ1m以下のものが13基と全体の約1/3を占め、1.5m以下のものは22基と半数を占めています。1mと言えば、おとなはしゃがまないといけないう高さです。

これに対し、観音堂では、22基(1基は高さ不明)の平均値1.60mを測り、1m以下は5基、1.5m以下は7基と、全体に字刈より玄室の高さが高いことがわかります。

では、なぜ1.6mもの高さが必要なのでしょう。単に遺骸を安置するだけなら、これほどの高さは必要ありません。このように考えてはどうでしょうか。つまり、観音堂では、玄室内で人間が立って歩くだけの高さが確保されていると考えるのです。

背丈の低い横穴の分布を字刈横穴群のなかでみると、C・D・G・H・J・K群に多く

見ることができます。これらの群はいずれも、宇刈横穴群のなかにあっては、群を構成する横穴の基数が少なく、横穴の立地条件も悪い、いわば、宇刈横穴群内の弱小集団と言えます。

これらの横穴では、遺骸を玄室に押し込んで、入口に蓋をして葬儀を終わりにするのではないのでしょうか。この好例が、今回調査された83号穴だと考えられます。

83号穴の内部は、後世の再利用により擾乱を受けているとも考えられますが、玄室内からの土器の出土はなく、土器はすべて墓前域から出土しています。83号穴では、人を葬った後、石等で入口に蓋をして、墓前域で葬儀を行なったものと考えられます。

ここで、背の高い横穴の葬儀について少し触れてみましょう。

観音堂では、玄室に遺骸安置場所+アルファのスペースがあることは先に触れました。このスペースが葬儀の場に当たるのではないのでしょうか。観音堂では玄室内から死者に副葬された土器が出土しています。副葬される位置は、遺骸の周辺と玄室の袖の部分が圧倒的に多いのです。このうち、袖の部分から出土する土器は乱雑に置かれた状態で、土器を袖の部分に集めたものと考えられます。これらの土器は本来、玄室内に安置されていたのではないのでしょうか。そして、この安置する場所が、遺骸の手前の敷石のない部分ではないのでしょうか。このスペースは、土器の副葬の場であるとともに、葬儀を行なう場でもあると考えられます。そのため、玄室内は人間の背丈ほどの高さが確保されているのだと考えます。

ここで、宇刈横穴群の第2の特徴をまとめてみましょう。

宇刈では、葬儀は横穴の外で行なわれることが多かったものと考えられます。そのために、横穴の規模は、玄室長平均2.129m、奥壁高さの平均1.336mという小規模な横穴が多く見られると言えます。そして、これは时期的に観音堂より新しくなるからではなく、宇刈横穴群というひとつの横穴群の持つ特徴と言えます。

(前田庄一)



PL. 3 発掘調査区域全景（左より85、84、82、83号穴）

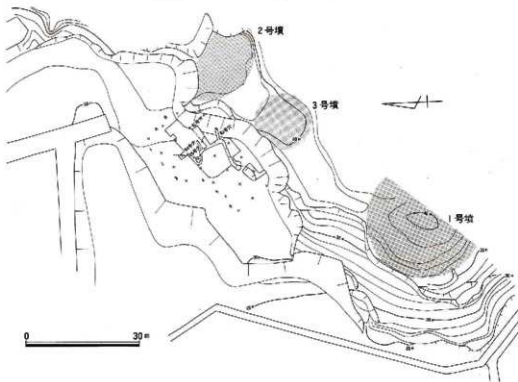
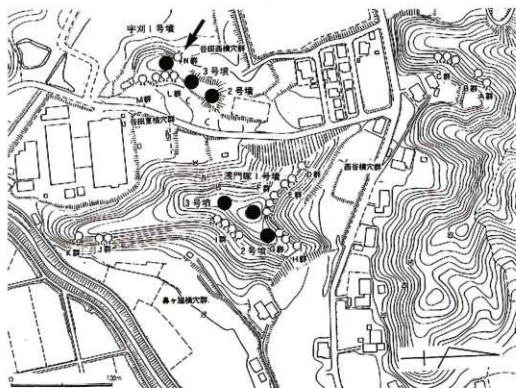


Fig. 3 宇刘横穴群周辺地形図

4. 調査のあらまし

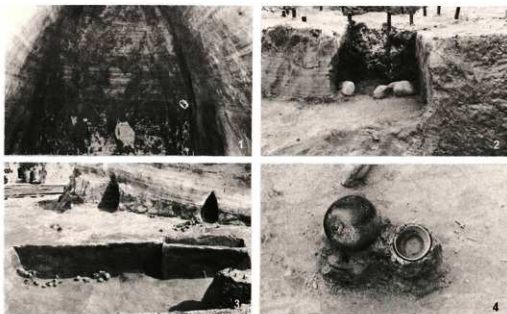
今回の調査では83号穴以外はほとんど削平されていましたが、新発見の2基(84、85号穴)を含め4基の横穴墓とその墓前域のほぼ1単位の横穴群が完掘できました。

82号穴は、本単位群の中央に位置し、規模も一番大きく盟主的な存在であったと考えられます。玄室は⁵⁰⁰平入構造で、羨道部は削平されているため明らかではありませんが、羨門部で最大巾をもち、次第に巾を減じながら墓前域にいたる構造であると推定されました。玄室の断面形は⁵⁰⁰尖頭形であると思われます。

83号穴は、今回調査の横穴墓の中では一番保存が良く、構造も明らかにできました。平面形は、羨道と玄室の境が不明瞭になった⁵⁰⁰筒形構造をしています。断面形は、天井部が尖ったような形で、尖頭形と呼ばれるものでした。形としては82号穴の玄室と羨道を明瞭に分けるものに比べると、退化したものと考えられています。玄室内には人頭大の礫が多く詰められたように出土しました。それらの礫に混じって昭和期の花瓶が発見され、敷石などの施設ではなく付近の開墾などで投げこまれたものと考えられます。

84号穴は、82号穴の西どなりに検出された横穴墓です。削平のため東壁のごく一部が検出されただけでしたが、おそらく83号穴に類似した筒形構造の横穴墓であったと思われます。

85号穴は、いわゆる小形横穴墓で墓前域の入口付近に作られていました。入口は巾約50cm、高さ約40cmで、成人の入る大きさはまったくなく、改葬あるいは火葬骨を納めた横穴墓と考えられ、横穴墓としては最終末の形態です。入口部分にこぶし大の礫が認められ(PL. 4-2)、



PL. 4 1. 82号穴内部(奥壁部分) 2. 85号穴(南より)
3. 墓前域土層(南西より) 4. 遺物出土状況(Fig. 7 2・7)

この隙は横穴墓の入口
をふさいだ石(閉塞石)
と思われます。

横穴墓は形態的には
古い方から82号穴→83
号穴・84号穴→85号穴
の順番が考えられます。

墓前域は長方形に掘
りこまれたもので、奥
行約3.4m、巾約7m、
横穴入口(羨門)付近
の深さ約1mほどのも
のでした。一般的な横
穴墓の墓前域にくらべ
て、深く保存状態の良
好なものでした。82号
穴と84号穴の間に深さ
約10cmの段差があり
ます。この段差は84号
穴を西側に拡張する際
に、床をやや深く掘っ
たためにできた段と思
われます。同様に82号
穴と83号穴の間には段
差はありませんが、横
穴間にやや間隔がある
ため、やはり83号穴を
作る際に東側に墓前域
を拡張したと考えられ
ます。また、墓前域の
土層を見るかぎり(P
L 4-3)、全体的に
自然堆積をしており何
回か改修が行われて
いたと考えられます。

(松井)

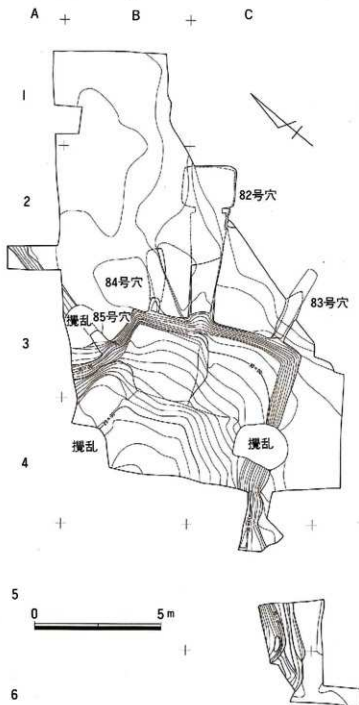


Fig. 4 調査区域全測図

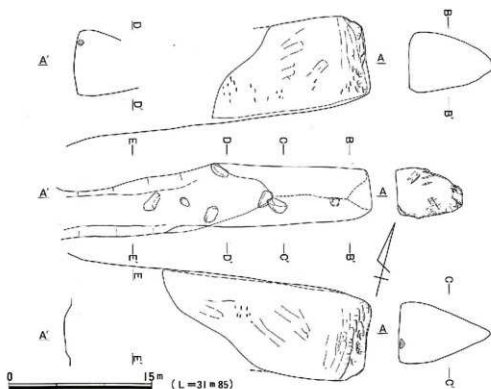


Fig. 5 83号穴実測図

5. 副葬された品々

今回の調査で出土した遺物は、おもに素焼の土器類です。古墳時代の土器は Fig. 7 の1～7の須恵器、Fig. 6の1、Fig. 7の5に図示しました土器の2種類の流れがありました。

須恵器は今から約1600年前頃に朝鮮半島より伝来してきた焼物で、ロクロで成形した後、トンネル式の穴窯で焼かれます。外見上では、多くは灰色やねずみ色をした硬い焼物で現在の陶器のように釉薬はかかっていません。袋井市内では岡崎の衛門坂に古窯跡があることが知られています。衛門坂古窯は、3～4基あるらしいのですが、袋井市内の古墳から出土する須恵器をまかないきれぬ量はなく、多くは大規模な古窯跡群のある湖西の地より運ばれてきたようです。また、森町でも古窯跡が発見されたと伝えられ、小規模な地方窯の実体が明らかにされつつあります。

土器は古来より焼かれてきた縄文土器（今から1



Fig. 6 出土遺物(1) (83号穴墓前城)

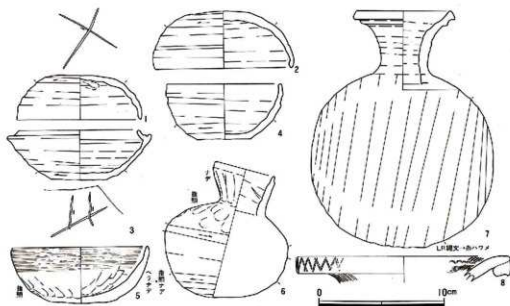


Fig. 7 出土遺物大略図(2) (1. 82号穴羨道 3 82号墓前域 2・4・7. 83号墓前域)
(5・6. 84号穴墓前域 8 C-5 拡張区黒色土中)



PL. 5 出土遺物

万年～2000年前)、弥生土器（今から2000年～1700年前）と同じような方法で焼かれた素焼の土器と思われます。窯跡が発見されることは少なく、多くは小さな竪穴を掘りその中で焼かれた野焼のような、簡単な施設で焼かれたと考えられます。外見は須恵器とは一見して異なり、赤色でやわらかい感じがします。

古墳や横穴墓などを発掘しますと須恵器が割合多く出土するのですが、人々の住んでいた集落跡の発掘をしますと、土師器が圧倒的に多く出土します。このことから、比較的簡単でどこでも焼くことができます土師器は日常よく使われており、須恵器の多くは墓の副葬品や祭りの道具として非日常的な使われかたをしていたのではないかと推定されています。

また、土師器は現在「かわらけ」として見ることができますが、須恵器は平安時代中頃から鎌倉時代（今から約1000年～700年前）あたりに初瀬の見られます軸の施された陶器によって変わられ、現在は見ることはできません。

今回の調査では、墓前域から祭りに使われたと思われる須恵器、土師器が出土しました。須恵器は、皿状の形をした3の^{ツバ}杯、その蓋として使用された1、2の^{ツバ}杯蓋、蓋のつかないコップ状の形の4の杯、水や酒でも入れ水差のように使われたと思われる6の^{フラスコ}平瓶、7のフラスコ瓶（理科の実験で使うフラスコに似ているため）がありました。杯や平瓶などで、墓の前で酒盛の儀式でもしたのでしょうか。

土師器は、5の杯や Fig. 6 の食物の煮炊き用に使われたと思われる甕形土器が出土しています。注目されますのは、使われていると付着するはずのススが、今回の調査で出土した甕形土器の外面には見られず未使用のものと考えられます。何かに供え祭りに使ったものか、改葬や火葬にした骨を入れた蔵骨器として使用されたものではないかと推定されます。

これらの土器類は、古墳時代でも終り頃（今から約1300年前）のものと思われます。さらに細かく観察しますと2時期に分けられ、2世代以上の埋葬時期があったことがわかります。

8は谷の埋土から中世の土器片とともに出土した、横穴墓よりはるかに古い弥生時代後期（今から約1800年前）の甕形土器の口縁です。丘陵上より転落してきたと思われ、丘陵上にある古墳（円墳）のいずれかが、弥生時代の墳墓（方形周溝墓）の可能性がでてきました。

（松井）

*）須恵器は杯を見ると、蓋は口径10cmの1と口径11cmの2、杯身は2の蓋とセットになる最大径11cmの3があり、2時期が考えられる。前者は中村編年Ⅱ-6、後者は中村編年Ⅱ-5に併行すると思われる。4の杯は中村編年Ⅱ-6、7のフラスコ瓶は頸部が短く古い感じがするが、4の杯とともに出土している。また、須恵器の中で、1、6などはややひしゃげた作りで、色調も暗灰色を呈する異質なグループがある。他のものは明灰色～灰白色の色調を呈し瀬西産と考えられるが、1、6は太田川水系のいずれかの窯跡（衛門坂か）からの供給とも考えられ、注目される。（後藤建一氏御教示）

土師器の甕形土器については、2の杯蓋とともに出土しているため中村編年Ⅱ-5あたりと考えられる。しかし、口縁が水平に近く大きく開いており7世紀代の甕形土器であることは間違いないが、さらに奈良期の後にも編年されうる要素がある。

参考文献 中村 浩 1978 『陶器Ⅲ』 大阪文化財センター

6. お わ り に

遠江の横穴群は、伊豆の横穴群とともに静岡県下では双壁をなすものです。なかでも、袋井市の字刈、菅ヶ谷横穴群をはじめとする横穴群は、遠江の横穴群の一翼をになっていると言っても過言ではないでしょう。過去の調査例も、地蔵ヶ谷横穴群（大門）、金山横穴群（豊沢）、八幡ヶ谷横穴群（堀越）、道ヶ谷B横穴群（久能）など数多くあります。また、その中でも横穴群全体の群構成のわかる地蔵ヶ谷横穴群、頭椎大刀^{カササギノチカラ}、耳環^{ミミカサ}など貴重な遺物を出土した八幡ヶ谷横穴群など横穴墓の性格を知るうえで、重要な調査例も含んでいます。そうしたなかで、袋井市有数の字刈、菅ヶ谷横穴群は幸いにも保存されてきたため、調査されることなく現在にいたっていました。今回の調査は字刈横穴群では、最初の調査でわずか横穴墓4基の調査ではありましたが、前述してきましたように私たちに色々な語りかけをしてくれ、極めて有意義な調査であったといえましょう。以下、それらの要点と問題点の指摘をし、本書のしめくくりの言葉といたします。

1. 横穴墓の構造は、今回の調査結果では羨道と玄室を明瞭に分離した平入構造をなすものから、羨道と玄室の境が不明瞭となる筒形構造に変化していることがわかりました。こうした構造の変化は他の字刈横穴にもいそうなのですが、字刈横穴群に数多く見られる短い羨道をもった平面形が長方形をなすものと、平入構造のものとの関係については明らかにできませんでした。また断面形は尖頭形を主体とするがアーチ型のものも認められ、菊川水系などアーチ形を主体となす地域との地域差が何を表わすものか注目されます。
2. 小形横穴墓、蔵骨器^{カササギノチカラ}と思われる壺形土器などが見られ横穴墓の終末を知るうえで注目される資料となりました。こうした小形横穴墓は遠江において明瞭に見られませんが、伊豆の大北横穴群（伊豆長岡町）などでは石櫃^{イシツボ}（石で作られたお椀形の蔵骨器）と同様に火葬骨を納めたものと考えられています。こうした変化はすでに、比較的大型の82号穴からやや小形化した83号穴への変化にその初源を見ることができ、最近の研究では大化の薄葬令（646年）などの社会変化と関連させようと考えられてきています。

以上のような問題点を指摘することができましたが、字刈横穴群についてはなお明らかにできない問題点が数多くあり、それらの問題点を明確にしたうえで本報告の作成をしていく予定です。最後に、さらに横穴墓に興味をもたれた方のために、いくつか文献をあげましたので参考にして下さい。

（松井）

- ・池上 悟 1980 『横穴墓』 ニューサイエンス社 ☆横穴墓の概説書 入手しやすい。
- ・赤星直忠 1970 『穴の考古学』 学生社 ☆横穴墓の概説書 入手しやすい。
- ・静岡県考古学会 1981 『静岡県シンポジウム3 群集墳と横穴』 静岡県考古学会 ☆専門的 入手しやすい。
- ・静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』 ☆県内遠州地区横穴群の分布調査報告、専門的、入手しにくい。

——調査参加者・協力者——

(敬称略)

寺田 義昭・吉岡 伸夫・松井 一明
前田 庄一・高野由美子・進藤貴和子
川島 良一・大場 嘉平・佐藤 好孝
渡辺 菊男・大橋 庄一・太田 清子
清水建設株式会社

宇刈の横穴

昭和60年3月31日発行

発行 袋井市教育委員会
編集 袋井市国本 3070-1

印刷 株式会社 開明堂

